

随  
想ピケティと  
アセモグル

塩沢由典

大阪市立大学名誉教授

経済に関する分厚い本が相次いでベストセラーになっている。アセモグルとロビンソンの『国家は衰退する』(草思社、上下、2013年6月、全718頁)とピケティの『21世紀の資本』(みすず書房、2014年12月、全706頁)の2冊である。

このような大部な本が世界的に読まれることは、経済に関する人々の関心の高まりであり、経済問題の深刻さの表れでもあろう。

ピケティとアセモグルは、よく似ている。二人とも若く、まだ40歳台。1993年から2年間、ともにMITの若い教員だった。本も長期データに基づいて経済の大きな変化を主題としている。

経済学が長いあいだ短期の経済変動に注目してきたのに対し、成長や分配という経済学の古い関心にもういちど火を点けたという意味でも、二者はよく似ている。しかし、根本のところ二人の考えには大きな違いがある。ピケティが主流の経済学に懐疑的なのにたいし、アセモグルは主流派経済学思想の伝道者である。

『国家は衰退する』でスターダムに上ったアセモグルだが、後に出た『21世紀の資本』に追い越された。とうぜんおもしろくない感情もあろう。昨年暮れ、アセモグルとロビンソンが『21世紀の資本』の批判を公開して、それがまた反響を呼んでいる。

わたしも読んでみたが、よい勉強になった。批判を書くことは、本を書く以上に著者の考え方(の問題点)を明らかにする。しばしば批判を書くわたしも自戒せねばならない。

二人の批判の骨子は、表題「資本主義の一般法則の興隆と衰退」に集約される。リカードとマル

クスは資本主義の長期傾向法則を唱えたが、それらは指針としてまちがっていて人々を惑わした。ピケティも同様だ、というのだ。この見立ては公正なものではないが、かれらの「法則理解」そのものもまちがっている。とくにリカードについては丸で分かっていない。

リカードは長期には地主階級の所得シェアが増大すると論じたが、それは穀物法が継続すればという仮定のもとでの予想であった。かれの死後、穀物法は廃止され、国民所得に占める地代のシェアは低下した。アセモグルとロビンソンは、これをリカードの「一般法則」の反証としているが、事実は正反対で、これはリカード理論が妥当した例である。

理論はしばしば反事実的推論を用いる。二人はリカードの結論を条件なしの長期法則として捉え、事実に反するとした。しかし、仮定が異なるのだから、結論が異なるのは当然である。このことは、将来ノーベル賞をもらうかもしれないというような経済学者でも、ときに理論的思考がまったくできないことを意味している。これはアセモグル一人の特殊事例だろうか。

プロフィール.....  
しおざわ・よしのり 理論経済学 1943年、長野県生まれ。京都大学理学部数学科卒業。フランス留学中に経済学に転向、京都大学助手を経て、大阪市立大学助教授・同教授。2008年、中央大学教授、昨年3月定年退職。現在、大阪市立大学名誉教授。『市場の秩序学』でサントリー学芸賞。昨年『リカード貿易問題の最終解決』を出した。